

DPRI NEWSLETTER

特集
02

コロナ禍からその先へ



屋外で防災活動に取り組むシワタネホの中学生

防災研における主なコロナ対応／アンケート結果

リモート環境での研究(室)コミュニケーション
森 信人

在宅勤務における工作対応の見直しについて
山崎 友也

コロナ禍の「オンライン教授会」対応
竹辺 公子

日本人には頼れない! コロナ禍の防災教育
中野 元太

保育園が休園! さあ、どうする?!
竹見 哲也

オンライン環境を活かした国際セッション開催
山田 大志

オンライン会議の功罪
渡部 哲史

コロナ禍における研究の創出
宮澤 理稔

連載

- 07 研究の現場から 山 泰幸
語り合う場のデザイン —— 哲学カフェの試みから
- 08 お道具拝見 ⑧ 山下 裕亮
私、こう見えてすごいんです —— 音響通信装置
- 10 新スタッフ紹介
DPRI 掲示板 行事予定/受賞・表彰/人事異動
- 12 卒業生から 榎本 真梨
様々な価値観が必要とされる「宇宙開発」
編集後記



京都大学防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

特集

コロナ禍から その先へ

2002年2月から現在にいたるコロナ禍において、われわれ防災研でも困難な状況の中、知恵を絞って研究・教育・運営・支援活動を継続してきました。さらに、逆境を踏み台に、新たに創出し進展した活動等もあります。この経験と工夫を、防災研教職員対象に行ったアンケート結果と、それをもとにした寄稿を通じて記録し共有したいと思います。

国際共同研究先の
機関が
ロックダウンしてしまい、
研究方針を
大きく変更せざるを得なかった

公共交通機関を使った
出張が難しかったので、
公用車の長距離運転
で乗り切った

感染状況が
深刻になるたびに
出張が急遽中止に

過去のデータを
見直す
きっかけになった

研究成果には
至っていないが、
基礎を勉強し直す
ことができた

パソコンに向かう時間が
長くなるが増えて、
パソコン嫌いになった

運動不足に
ならないように
自宅マンションの
階段を上り下りした

研究室のドアに
「会議中」の
張り紙が多くなった

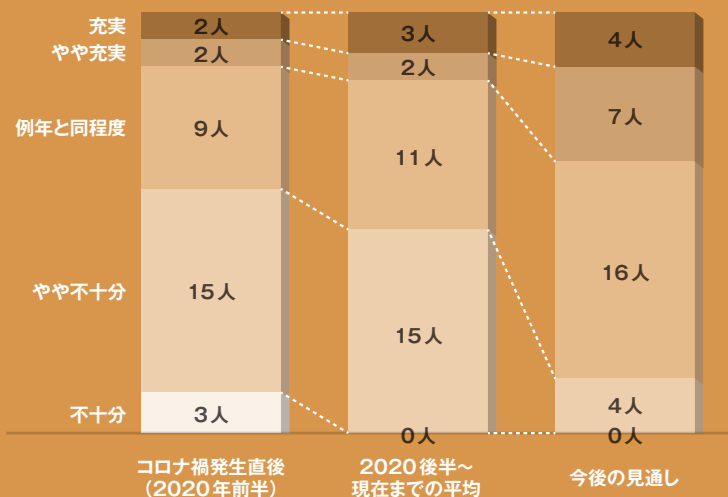
イベントを
オンライン開催にしたら
例年より参加者数が
増えた

防災研における主なコロナ禍対応

2020年	
2月	防災研研究発表講演会是对面開催するが懇親会は中止
3月	前期授業開始を5月7日に延期することを通知
4月	教職員のリモートワーク導入開始
4月	おうばくプラザハイブリッドスペース閉鎖 予約が入っていた訪問依頼もほぼすべてキャンセルに イベントや会議のオンライン開催が導入開始
5月	所長裁量経費によるマスク配布
7月	学内初の感染者が発生した旨の通知
10月	ハイブリッド型授業が本格化
10月	防災研公開講座は和歌山で現地開催
2021年	
2月	防災研研究発表講演会をオンライン開催
4月	原則、対面授業へ(対面↔オンライン繰り返す)
5月	海外出張の再開
7月	新型コロナウイルスワクチン大学拠点接種開始
10月	京都で予定していた公開講座をオンラインに変更して開催
11月	防災研70周年記念行事を対面開催(一部オンライン)
2022年	
2月	防災研研究発表講演会をオンライン開催
7月	おうばくプラザハイブリッドスペース再開
8月	外国人訪問者の受入再開

アンケート

2020年2月以降のコロナ禍において、
ご自身の活動状況を5段階で評価してください(回答件数計31件)



リモート環境での 研究(室)コミュニケーション



森 信人
MORI Nobuhito
気象・水象災害研究部門 教授

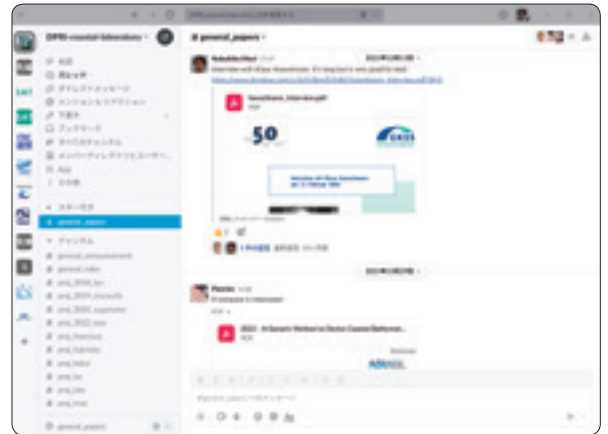
コロナ禍により問題となったのは学生とのコミュニケーションです。2014年から、研究では学生とのファイルのやり取りはDropboxを用いて行ってきました。また2017年頃から海外の研究者とは定期的にSkypeやZoomでオンラインミーティングを行っており、比較的オンライン環境には慣れていました。

しかし、研究室への出入りが実質的に難しくなった2020年4月初旬に学生とのコミュニケーションが極端に不足しました。そこで幾つかのチームコミュニケーションツールを試した結果、4月下旬からSlackを導入し、学生とのやり取りは全てSlackに移行しました。Slackは、学生1名ごと、プロジェクトごとにチャンネル（スレッドのようなもの）を作成出来るため、

メールよりもトピック毎の話題を時系列的に辿ることが容易です。Googleサービス、Dropbox, Doodle, Zoom, GitHubと連携可能で、また簡単なアンケートも取れます。

Slackにより、以前に比べて学生とのやり取りの履歴が確実に残り、2年以上立った今でもフル活用しています。勿論、重要なことは口頭でやり取りしますが、研究以外にも、良い論文の紹介、他愛も無い話題など色々なチャンネルを開設し、情報を共有できる環境に移行できたことはコロナ禍の副産物かも

しれません。同時期には、海外の共同研究者と複数のオンラインセミナーシリーズの開催も行い、海外との共同研究、論文執筆は以前より加速しました。これもサイドエフェクトの1つだと思います。



Slackの画面の例

在宅勤務における 工作対応の見直しについて



山崎 友也
YAMAZAKI Tomoya
技術室 情報技術グループ長

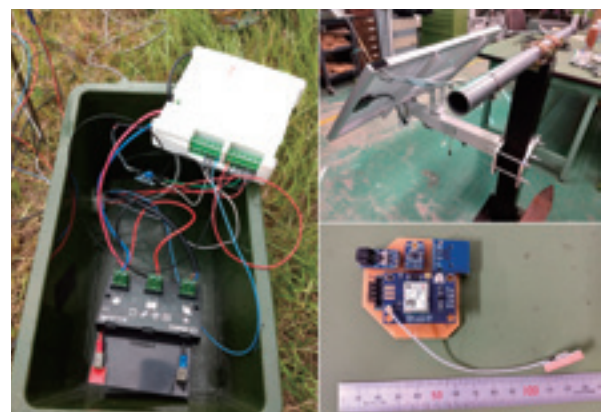
技術室の研究支援業務におけるコロナ禍の影響は、担当者によって多寡の差があります。私自身は、子どもの体調などの関係で在宅勤務の必要に迫られたことが大きな変化となりました。

私の担当は工作関係・情報関係業務が主です。在宅勤務が始まった当初は、サーバ操作やプログラム作成など、自宅からでも作業しやすい情報業務を優先的に行う傾向があり、工作業務への対応が滞りがちになりました。そこで工作業務を、設計・製作・テストといったいくつかの工程に分けて整理し、在宅でも対応できる作業を洗い出すことにしました。設計については、リモートでも職場のCADソフトなどを利用でき、出勤時と比べても遜色のない作業ができました。むしろ

それまでは工作室で使えるような備品材料を探しながら設計をしていた分、余計な時間がかかっていました。製作は、工具や工作機械が必要になるので出勤時にまとめて職場で行いました。テストは、例えば、製作した観測機器の動作テストなどです。こういった観測テストを自宅で行うことは難しいため、出勤時にはあらかじめ計画した条件によるテストだけを行い、得られたデータの処理をまとめて自宅で行うことにしました。これもテストとデータ処理を1パターンずつ交互に行うよりも効率が良くなった感があります。写真はこの

期間の製作例です。

現在では、在宅勤務をすることはほとんど無くなりましたが、その経験によってコロナ禍以前よりも業務の効率や時間配分についての意識が変わったように思います。



製作例

コロナ禍の「オンライン教授会」対応



竹辺 公子
TAKEBE Hiroko
宇治地区事務部防災研究所
担当事務室 事務職員

防災研全体に関わる事務を担当している担当事務室では、コロナ禍を受けて令和2年度から学系・教授会で段階的に導入されていくことになった「オンライン教授会」の準備のため、トライアル&エラーを繰り返しながらも毎回メンバー同士で色々と知恵を出し合い、どうすればスムーズな会議運営ができるのか、走りながら考える毎日でした。中でも大きな変更点は、教授会のたびに必要となる膨大な資料を入れたiPadを各参加者

へ配布するという方法から、ファイル共有ツールを利用して参加者各自のパソコンで資料を確認してもらう方法へと変えたことです。その後、対面形式での教授会が復活した後もこの方法を続け、結果的に会議準備にかかる時間を短縮できました。オンライン教授会で必要となるZoomミーティングの設定やGoogleフォームを利用した複雑な投票システムの構築などについては、技術室の方々に全面的に協力を仰ぎました。また、これ

まで紙媒体で提出してもらっていた研究業績ファイルや防災研の規程集も、これを機会にデータ化しました。これまで当たり前だと思っていた業務のやり方をオンライン教授会の導入をきっかけに見直したことになります。コロナ禍という初めての状況で正解が分からない中、比較的自由に挑戦できたことが「これもできるかも」という着眼点を広げることにつながったと思います。

日本人には頼れない！ コロナ禍の防災教育



中野 元太
NAKANO Genta
巨大災害研究センター 助教

コロナ禍でフィールドワークができない日々が続き、研究活動は完全に停滞したかという、必ずしもそうではありませんでした。もちろん、コロナ禍が社会に与えた影響は計り知れないので「コロナ禍を転じて福と為す」とは言い難いが、それでもフィールドワークの成果が定着した例があります。それが、メキシコ・シワタネホです。

メキシコ太平洋岸の町シワタネホは、映画『ショーシャンクの空に』にも登場する白砂の美しいビーチです。国際空港を備え、多くの観光客が集うこの町も地震・津波リスクを抱えています。2016年から学際的研究がスタートし、私は防災教育のためにこの町に通いました。パンデミックまでの約3年間で、延べ1万人以上を対象に地震・津波防災教育を進め、手ごたえを感じていました。そこにパンデミックです。学校は閉鎖され、地域活動も制限されました。私もシワタネホに渡航できなくなりました。これまでの積み重ねが吹き飛ばかに思えました。そん

な折、防災教育のバトンを受け取ってくれたのが、地元のシワタネホ市防災局です。コロナ禍でもできる防災教育プログラムを考案しました。津波の絵コンクールや屋外活動が中心の防災マップづくり、高知県黒潮町とシワタネホ市の中学校をオンラインで結ぶ防災交流など、より発

展的な防災教育が彼らの手によって生み出されました。

シワタネホ市防災局はパンデミックを機に「日本人にばかり頼ってはられない」と自らの力で防災教育を進め始めたのでした。コロナ禍でフィールドワークの成果が根付いていきました。



屋外で防災活動に取り組むシワタネホの中学生

保育園が休園！ さあ、どうする？！



竹見 哲也
TAKEMI Tetsuya
気象・水象災害研究部門 教授

保育園送迎生活を始めてから10数年経ちますが、その中でもこの冬のコロナ感染第6波の状況は大変なものがありました。人生の中には、異常な事態にあったことは、後で振り返るとあの時はどうやって乗り切ったんだろう？と思う場面が何度かあるものですが、この冬の経験はそれに近いものがありました。この冬は、保育園では1名でも感染者が出ると1週間の完全休園とすることになっていたのですが、子供の通う保育園は1〜2月の間に3度休園になりました。つまり、

延べ3週間強におよぶ期間、保育園に預けられない状況になりました。休園時は在宅ワークをしましたが、保育園児のいる状況では日中はまともに仕事をする事ができず、仕事時間は子供が寝てからの夜中になりました。1度は子供も陽性（無症状でした）になり、また、きょうだいの通う学校でも感染者が出たため、民泊を利用して自宅との隔離生活もするなど、家族内での感染対策にも気を遣いました。こういう状況で通常よりも家事は多くなり、限られた時間で効率よく

仕事をする必要がありました。休園中の最初の頃は、日中も普通に仕事しようと思いましたが、すぐにこれは無理なことが分かりました。育児中に在宅ワークする場合には、仕事の優先順位をはっきりさせて、日中に最低限やるべきことはやる、後回しにしても良いものは無理せずに後回しにするなど、思い切りが大事だと思いました。また、こういう困難な状況にあって、周りの方々に配慮いただいたのには感謝しています。

オンライン環境を活かした国際セッション開催



山田 大志
YAMADA Taishi
火山活動研究センター 助教

コロナ禍で広く普及したオンライン形式の会合ですが、ネットワーク環境下であれば世界中から参加できる利点があります。日本地球惑星連合2022年大会（JpGU 2022）では、International Volcanology (S-VC28) という国際セッションを、Chris Conwayさん、松本恵子さん（産業技術総合研究所）、Katy Chamberlainさん（Teesside University）と一緒に開催しました。国際的な視点に立った火山研究というタイトルを掲げていますが、開催の根底には世界における日本の火山学研究の認知度の向上という問題意識があります。ハイブリッド開催であったことと、筆頭コンビーナのConwayさんのご尽力もあり、今までJpGUに参加したことのないアメリカ、ニュージーランド、インドネシアなど海外の研究者も含めて25件もの投稿を頂きました。発表者の年代はベテラン教授から学生まで幅広く、第1回としてはかなり盛況に開催で

きたのではと思います。

コンビーナとしてセッション開催に携わることは、いかに研究をInternationalレベルにするか、自分のフィールドから他の火山に普遍的に通用する成果をどう出す

か、という自身への問いかけの機会にもなりました。Conwayさん作成のセッションロゴには第1回開催として1の数字が描かれていますが、来年も開催する予定ですので興味のある方はぜひご参加下さい。



International Volcanologyのセッションロゴ
(Chris Conwayさん作成、2022年版)

オンライン会議の功罪



渡部 哲史
WATANABE Satoshi
気候変動リスク予測・適応研究
連携研究ユニット 特定准教授

コロナ禍による研究や教育に関する大きな変化の一つはオンライン会合の普及でしょう。オンライン会合の利点は言うまでもなく、どこからでも参加できることです。異なる場所の参加者が従来よりも気軽に集まれるようになりました。どこからでも参加できるということは、観測・調査の隙間時間に会合に参加するといった調整も可能ということです。観測やヒアリング調査では調査対象地に出向く必要がありますが、用務がある時間はそのうちの一部の時間だけということもしばしばあ

ります。これまではいくつかの会合の予定があるために現地での観測・調査に出られなかったような場合でも、会議のオンライン化により観測・調査に出やすくなったという変化がありました。

ただし残念ながら利点ばかりとも言えず、利点の反面としての負の側面も少なからずあります。どこからでも参加できるため会合開催のハードルが下がり、隙間時間にも会合が次々に入るようになりました。結果的に、以前よりも会合に割く時間は増えているかもしれません。観測・

調査という観点でも負の側面があります。従来は現地入りした段階から観測・調査のみに集中していたものが、断続的な会合への参加により結果的に従来よりも集中できる時間が減少しているように感じます。

結局は参加しなければならない用務が多いか少ないかということかもしれません。オンライン会合のこのような功罪について、利点は最大化し欠点はできるだけ最小化するようにしていきたいものです。

コロナ禍における研究の創出

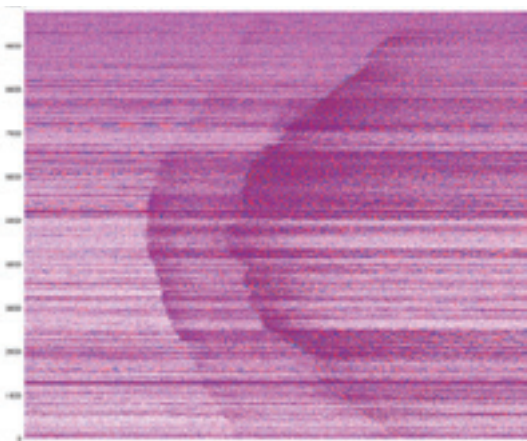


宮澤 理稔
MIYAZAWA Masatoshi
地震災害研究センター 准教授

コロナ禍に加えて他の様々な理由もあって、長年取り組んでいたある地震観測を終了させました。デスクワークではない何か新しいことを代わりに始めたくても、自由には行動しづらかったり、予算も人手も不足していたりと、現実的に困難な状況でした。しかし、コロナ禍であるからこそ人間活動に伴うノイズは少なくなるので、都市部で良質な地震記録が取れる機会に遭遇したと考え直し、道路沿いで光ファイ

バーセンシングによる地震観測を画策しました。この先端技術はコロナ禍以前から知ってはいましたが、測定機材もお手頃に利用しやすくなってきたタイミングでした。また顕在化する人手不足にも対応するかのよう、地中光ケーブルは既に日本国中に張り巡らされている上、数十kmにも及ぶ光ケーブル沿いのあらゆる場所の揺れを簡単に観測できるため、困難な状況にマッチした内容となりました。光ケー

ブルの借用はオンライン会議等も活用してスムーズに行え、研究費もいくつか獲得できました。そして観測された地震の記録は驚くほど良質で、次世代の地震観測の幕開けを見ているかのようです。気がつけば、地震災害調査への適用や、大規模データを扱う点で他分野との融合へと話が進んでいました。ところで低ノイズレベル下での観測は、当てが外れてしまいましたが、今後も予想外の進展が期待できそうです。



京都府南部の地震の波を50 kmにわたり約1万か所で観測した例



測定に使った光ファイバーケーブル



日曜日の朝に、カフェに人々が集まって、さまざまなテーマについて語り合う、「哲学カフェ Café Philosophique」と呼ばれる場がある。飲み物代さえ払えば、誰でも参加でき、名乗る必要もない。話したい人は、どんな意見を言ってもよく、聞くだけでもかまわない。一つの結論を出したり、合意を形成する必要もない。いろんな意見を参加者が共有するだけである。

災害や過疎からの地域復興をテーマに、住民、行政、NPOと協働しながら、長らく、まちづくりの実践的研究に取り組んできた。そこで気づいたのは、地域のなかには、自由に語り合うことができる場が存在しない、ということである。その理由は、社会的な問題や地域の抱える問題、人生の悩みも含めて、「マジメ」な話題は、話す側も躊躇するし、聞く側もどう対応してよいかわからないため、マナーに反すること、いわばタブーになっているからと思われる。しかし、語り合うことがなければ、問題意識を共有することも、まして問題解決に向けて、協力して行動を起こすこともあり得ないだろう。



2009年から長期密着型のフィールドワークを行っている徳島県東みよし町にあるカフェ・パパラギにて、2015年から3ヶ月に一度、哲学カフェを定期的に運営している。参加者は、毎回20名前後、多いときには40名を超えることもある。地元の住民を中心に、県の内外からも訪れる。近年は、国内外の研究者の参加も増えている。防災研関係では、岡田憲夫名誉教授をはじめ、Ana Maria CRUZ、

多々納裕一、大西正光、梶谷義雄らの教員は常連で、海外からの客員教員も防災研に滞在中に参加している。

哲学カフェでは、参加者はみな真剣な表情で話に耳を傾ける。時折、笑い声があったり、どよめきが起きたり、

和気藹々とした雰囲気の中、誰かが話を終わると、拍手で場が包まれる。テーマは、第1回目の「知」に始まり、「仕事」「遊び」「常識」など、毎回さまざまである。たとえば、第17回目は「災害」がテーマとなった。こちらが強制したわけでもなく、自然なかたちで、「災害」がテーマと決まり、参加者が自由に語り合い、問題意識を共有する貴重な機会となった。

哲学カフェというと、近寄り難い印象を与えるが、一方で、さまざまな問題について深く考えてみたい、意見交換してみたいという人々にとっては、貴重な社会参加の機会となっている。また、哲学カフェの参加を通して、新たなつながりを生み出し、さらに語り合うための場づくりのための作法を習得した人たちが、さまざまな地域活動を展開するようになってきている。

いま、まちづくりの現場において、語り合う場をいかにデザインするのが核心的な課題となっていると思われる。



研究者たちが、研究に欠かせないツールについて愛をこめて語ります

お道具拝見

8

私、こう見えてすごいです

音響通信装置

山下 裕亮

YAMASHITA Yusuke

地震災害研究センター宮崎観測所 助教



地震の多くは海で起きているため、海底観測は地震研究にとって重要です。しかし、陸と違って深海底には観測に行くことができません。そのため、海底に設置する観測機器の多くは、船で観測したい地点の上まで行き、海中に自由落下方式で投げ入れて設置し、回収時には錘を切り離して自己浮力で浮上させるという形をとります。つまり、一度海に入れてしまうと、我々は観測機器と直接コミュニケーションができません。そこで登場するのが「音響通信装置」です。海中では電波が通らないので、基本的には音波を使います。我々が用いている機材は、約10 kHz前後の超音波で、10km程度の範囲に届くといわれています。

深海底の愛しのあの人と超音波で「会話」

音響通信は、コントローラーの「船上装置（親機ともいわれる）」と、送受波器の「トランスデューサー」とを用いて行います。多くの船では、舷側からトランスデューサーを人力で海に投げ込みます（図1）。これが結構な手間で、回収時は揺れの中で船体にぶつけないようにササッと回収することがポイントです。腕力に自信のある人は活躍間違いなしです。



図1 トランスデューサーの投入。ノイズ対策として、側面を白い布に包まれています（日向灘における学生実習の1コマ）

できます。しかし、ノイズが大きいと、機器からの返事を受け取ることができないので、信号雑音比を上げる努力が必要です。一方的に話しかけてもダメで、ちゃんと聞く努力が必要なのです。人と同じです。音響通信

時には、船のクラッチを抜いてもらい、できるだけエンジン音を静かにしてもらうようお願いをすることが多いです。

この装置の最も重要な役割は、錘の切り離しコマンドの送信を行うことです。これがうまくいかないと、まず回収することはできません。切り離しコマンドを送る際には、間違えて送信しないように2本の指を使って2つのボタンを押す仕組みになっています（図2）。人によっては、これがうまく押せなかったりします。焦ってはいけません。切り離しコマンドが無事に受け入れられたら、浮上した観測機器との再会を待つのみです。



図2 音響通信装置（四角い箱）。PCとシリアル通信をして様々なコマンドを送信します。この写真は切り離しコマンドを送信しています。

海底観測で引っ張りだこの人気者

我々の音響装置は防災研の共同利用機器にもなっており、他大学の研究者や学生も利用しています。一見地味ですが、海底観測を行う際にはなくてはならない装置です。これからも国内外で大いに活躍してくれることと思います。

そういえば、以前、片思いしていた人に恋人がいることがわかり、「愛の切り離しコマンド」と叫んでコマンドを送った後輩がいました。錘の切り離しはできましたが、もちろん愛の切り離しはできませんでした。使用用途の範囲内でお使いいただくことをお勧めします。

若手研究者から ⑱

防災研の将来を担う、准教授・助教・研究員・博士課程学生ら
若手研究者による研究を紹介します。



長嶋 史明

NAGASHIMA Fumiaki

地震災害研究センター
地盤震動研究分野
准教授

地盤構造・強震動・被害予測の高精度化

私は、地震によって引き起こされる被害をより高精度に予測するために、地盤の構造を調べ大きな地震が起きた時にどのように震動するのかを予測する研究などを行っています。地震動は、①断層などの震源で発生し（震源特性）、②地中深くを伝播し（伝播経路特性）、③表層地盤で増幅される（サイト増幅特性）と考えられ、それぞれの特性に関して多くの研究が行われてきました。私がこれまで行ってきた研究の多くは3つ目の特性である「サイト増幅特性」に関するものです。

サイト増幅特性は対象地点周辺の地盤構造を反映しており、場所によって大きく変化します。例えば、埋め立て地や盆地などの柔らかい地盤では周期の長い地震動がよく増幅され、一方山地などの硬い地盤では短い周期の地震動が増幅されやすいです。高精度な地震動予測を行うためには予測地点固有のサイト増幅特性を把握する必要があり、サイト増幅特性はその要因である表層地盤構造から推定されます。表層地盤構造の探査手法には様々なものがあり、私は地震動記録を用いて地

盤構造同定およびサイト増幅特性の推定を行ってきました。私の用いた手法の利点として地盤の深部から浅部までを一括で推定できることや、地震動記録を直接的にサイト増幅特性の関数として解釈できることなどが挙げられます。この手法を国内外の様々な地震観測点に適用し、地震基盤からごく表層までの地盤構造を同定してきました。より正確な地盤構造の同定に向けてまだまだ改善の余地はあるので、簡便で高精度な地盤構造同定手法の開発を続けていきたいと考えています。また、大地震などにより地盤が大きく揺れた際に地盤中のひずみの大きさに応じてサイト増幅特性が変化するので、この揺れの大きさに対するサイト増幅特性の非線形な変動をとらえようと試みています。

これまで以上のように、地盤構造やそれを用いた強震動予測に関する研究を行ってきました。今後は上記に加えて地盤上にある建物などの震動特性や被害についても研究を行い、建物被害や人的被害の軽減に資する研究を行いたいと考えています。



図1 雪中での地盤震動観測の様子

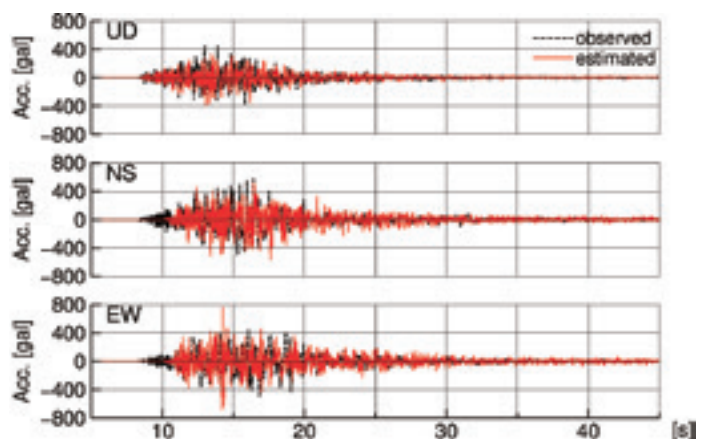


図2 強震動予測の例(観測記録(黒)をより簡便な手法で精度よく再現・予測(赤)する)

新スタッフ紹介

とさ なおこ
土佐 尚子

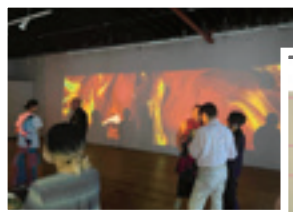
産学共同研究部門アートイノベーション
(凸版印刷) 研究領域
特定教授



なぜ防災研究所にアートがあるのかとよく聞かれます。私は、日本人が災害時に逃げない人が多いことにショックを受け、アート表現で人の生きる力を増進し社会や産業に貢献したいと考えています。

出身地 福岡市

趣味 いけばな (池坊)。写真はSound of Ikebana の型です。



いとう えり
伊藤 恵理

社会防災研究部門
地震リスク評価高度化
(阪神コンサルタンツ) 研究分野
特定助教



生まれた年の夏に萬福寺に連れられて以来黄檗にはご縁があるようで、学部時代より途中2年の不在期間以外はずっとこの地でお世話になっています。研究では、地震による人的被害 (と悲しみ) の低減に少しでも寄与することを最終目標に、地震被害評価手法の高度化・統合化を試みています。防災研に貢献できるよう努めて参ります。

出身地 大阪府

趣味 ピアノ等を弾くこと、歌うこと、高校野球観戦 (写真は西日が差し込む甲子園球場です)



ばん うねん
PANG Yunian

産学共同研究部門アートイノベーション
(凸版印刷) 研究領域
特定助教



2020年の京都大学思修館卒業以来、土佐研究室で助教を務め、土佐研究室作品の技術開発・撮影・制作などを行っています。主に物理芸術・情報学と心理学の分野で論文を執筆。2016年国連学生フォトコンテスト三等賞を獲得。2020年Sony Vlog Challenge Winnerを獲得。現在「抖音-Douyin (中国版TikTok)」でフォロワー58万人。2022現在、日本食文化のドキュメンタリーを制作中です。

出身地 中国重慶

趣味 映画、e-sports、撮影



るえるでゆく
ROUET-LEDUC

べるとらん
Bertrand

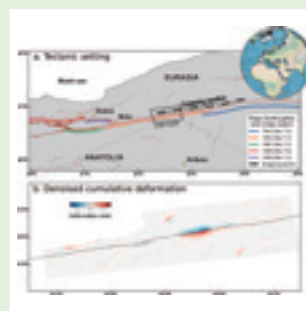
地震災害研究センター宇宙測地研究領域
特定助教



Through the use and development of intelligent algorithms, I aim to better characterize fault slip behaviors, study the interactions between slip modes, and provide real-time slip estimates for earthquake and tsunami early warning.

Hometown Paris, France

Hobbies: Judo/jujitsu, rock climbing



第9回サイエンスコミュニケーター養成講座

2022年5月23日に実施した第9回サイエンスコミュニケーター養成講座で、以下の7名を新たに防災研究所サイエンスコミュニケーターに認定しました。サイエンスコミュニケーターは、防災研へ来訪される方々への案内役を務めます。

末川 輝 工学部建築学科B4
土井 清誠 工学部建築学科B4
中辻 綾香 工学部地球工学科B4
吉川 峻平 工学研究科建築学専攻 M1

岡崎 恵 理学研究科地球惑星科学専攻 M2
齋藤 健太 工学研究科社会基盤工学専攻 M2
大柳 修慧 理学研究科地球惑星科学専攻 D3

DPRI 掲示板

受賞表彰

所属等は受賞当時のもの

池田 芳樹 教授

The 2022 International Association for Structural Control and Monitoring, Takuji Kobori Prize

[2022年7月]

■受賞論文

Fundamental equation based on pole allocation for interstory seismic isolation of buildings (Structural Control and Health Monitoring, Volume 28, Issue 3, March 2021, DOI:10.1002/stc.2687)

土井 一生 助教・

釜井 俊孝 名誉教授・王 功輝 教授 ほか

日本応用地質学会
令和4年(2022)論文賞

[2022年6月17日]

■受賞業績

「地震波形記録による斜面崩壊の発生場所と発生形態の推定 -2017年九州北部豪雨災害・日田市小野地区の斜面崩壊を例として-」応用地質、61巻、5号、245-254、2020。」

間瀬 肇 名誉教授・

平石 哲也 教授 ほか

土木学会令和3年度論文賞

[2022年6月10日]

■受賞論文

「フルスケール実験に基づく越波・越流遷移モデルと高波・高潮浸水シミュレーションへの実装」土木学会論文集B2(海岸工学)Vol.76, No.1, pp.7-19, 2020.

寶 馨 特任教授

令和3年度
土木学会功績賞

[2022年6月10日]

竹見 哲也 教授

AAS Outstanding
Editor Award 2022

[2022年5月26日]

■受賞理由

Expecional contributions to Advances in Atmospheric Sciences.

長嶋 史明 特定助教

令和3年度日本地震工学会
論文奨励賞

[2022年3月25日]

■受賞論文 長嶋史明・川瀬博・伊藤恵理

「海外内陸地殻内地震のインバージョン結果データベースを用いたスケーリング則の検討」日本地震工学会論文集 Vol.21(2021), No.5, pp.140-160.

山崎 友也 技術職員

令和3年度
地震火山災害予防賞

[2022年2月4日]

■受賞題目

「実験的研究の技術支援による地震時応答に関する新知見の創出と社会の耐震安全性向上への貢献」

王 功輝 教授

Outstanding Editorial Board
Member Award

[2022年1月]

■受賞理由

In appreciation of outstanding editorial service (2016-2021)

河谷 能幸

(気象・水象災害研究部門/
工学研究科M1)令和4年度
吉田卒業研究・論文賞

[2022年7月8日]

■受賞論文

「LESを用いた波動が生起する線状対流系の勃発メカニズム」

加藤 慎也

(地震災害研究センター/
理学研究科D3、JSPS特別研究員)日本地球惑星科学連合
2022年大会
固体地球科学セクション
学生優秀発表賞

[2022年6月4日]

■受賞論文

Ductile shear zone of the Arima-Takatsuki fault zone as a fluid pathway

後藤 ひかる

(水資源環境研究センター/
工学研究科M1)2022年度
土木学会関西支部
年次学術講演会
優秀発表賞(口頭発表)

[2022年5月29日]

■受賞発表

「Magatダムの洪水防災操作に基づくCagayan川流域の洪水リスク軽減方策」

岡本 悠希

(水資源環境研究センター/
工学研究科M1)2022年度
土木学会関西支部
年次学術講演会
優秀発表賞(ポスター発表)

[2022年5月29日]

■受賞発表

「大井川における縦列ダム群の洪水防災操作に関する研究」

Tan Yuqing

(流域災害研究センター/
工学研究科D3)Outstanding Young Engineer
Contribution Award,
IABSE Symposium
Prague 2022

[2022年5月27日]

■受賞題目

A thermo-mechanical coupled model of hysteresis behavior of HDR bearings

伊東 直哉

(流域災害研究センター/
工学研究科M1)令和4年度
(公社)砂防学会
研究発表会
対面口頭発表優秀発表賞

[2022年5月13日]

■受賞発表

「土砂による橋梁部の河道閉塞と氾濫についての研究」

左藤 起也

(流域災害研究センター/
工学研究科M1)令和4年度
(公社)砂防学会
研究発表会
対面口頭発表奨励発表賞

[2022年5月13日]

■受賞発表

「レーダー降雨観測・掃流砂観測と土砂動態シミュレータを用いたデータ同化による流域スケールの土砂流出の予測手法」

西尾 潤太

(元京都大学大学院工学研究科、
2021年3月卒業)令和4年度
(公社)砂防学会
研究発表会
ポスター発表優秀発表賞

[2022年5月13日]

■受賞発表

「マルチスケール流域土砂動態モデルの開発と適用」

小林 正直

(元京都大学大学院工学研究科、2021年
3月卒業、現国土交通省九州地方整備局)令和4年度
(公社)砂防学会
研究発表会
ポスター発表奨励発表賞

[2022年5月13日]

■受賞発表

「焼岳足洗谷における深床堆積土砂量の変化と流出過程に関するシミュレーション」

内藤 秀弥

(流域災害研究センター/
工学研究科 卒業生) ほか令和4年度(2022年度)
砂防学会技術賞

[2022年5月11日]

■受賞論文

「TDRによる土砂濃度計測を用いた山地河川での浮遊砂鉛直分布の観測」砂防学会誌、71(4)、3-12、2018.

>>> 人事異動

* 教授・准教授・助教・職員(それぞれ常勤・特定・特任)について掲載。名称付与は新規のみ掲載。

[2022年4月16日]

巨大災害研究センター国際災害情報ネットワーク(客員)領域 DANDOULAKI, Miranta 客員教授/採用

[2022年5月1日]

産学共同研究部門アートイノベーション(凸版印刷)研究領域 土佐 尚子 特定教授/採用

← 総合生学館より

産学共同研究部門アートイノベーション(凸版印刷)研究領域 PANG, Yunian 特定助教/採用

← 総合生学館より

地震災害研究部門構造物震害研究分野 長嶋 史明 准教授/採用

← 社会防災研究部門地震リスク評価高度化(寄付)部門 特定助教より

[2022年6月1日]

火山活動研究センター 小林 哲夫 特任教授/名称付与

[2022年7月1日]

社会防災研究部門地震リスク評価高度化(阪神コンサルタンツ)

研究分野 伊藤 恵理 特定助教/採用 ← 特定研究員より

巨大災害研究センター 中津 良平 特任教授/名称付与

巨大災害研究センター 櫻井 繁樹 特任教授/名称付与

巨大災害研究センター 中村 伊知哉 特任教授/名称付与

[2022年8月1日・改組以外の異動]

火山活動研究センター 棚田 嘉博 特任教授/名称付与

卒業生から。

防災研で学び、各界で活躍中の卒業生を紹介します。

様々な価値観が必要とされる「宇宙開発」

私はJAXAの研究開発員として現在「船外曝露実験」を担当しています。船外曝露実験は、国際宇宙ステーション（以下、ISS）外の宇宙環境を利用して材料曝露や宇宙線の観測などの実験を行います。私の仕事は、船外曝露実験をする実験装置のユーザとISSを結ぶインテグレーターの役割で他実験とのスケジュール調整、装置の安全審査支援、不具合時の影響範囲の調査など業務内容は多岐にわたります。

防災研にいたころは、人工衛星から地震前後の地殻の変化を検出し、どんな断層運動が起きたのかを推定



国際宇宙ステーションの「きぼう」日本実験棟の模型

する研究をしています。今の仕事は元の専門とはかけ離れているため、入社当初は、周りの話についていけず悩んだ事も多々ありましたが「我々に求められているのは特定の専門

性というよりは、様々な視点から気づきや指摘をあげ全体をリードしていく能力。その仕事はメーカーでも専門家でもなくあなたの立場でしかできない」と先輩に言われ、世界が広がったのを覚えています。実際に、私の周りでは航空宇宙だけでなく様々なバックグラウンドを持った方が多いです。今の部署の仕事も相変わらず地震学とは一見関係ありませんが、仕事相手の実験ユーザの多くは研究者なので、宇宙利用をする側だった学生時代とは逆に、宇宙利用をマネジメントしてサイエンス研究を支える立場になったと言えます。私は宇宙の専門家ではありませんが、防災研究所に所属していた頃の想いや経験を糧に、これからも利用者の想いに寄り添ってミッションを支えられるよう頑張りたいと思います。

榎本 真梨
ENOMOTO Mari
JAXA有人宇宙技術部門 きぼう利用センター
京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻修士課程 2010年3月修了



編集後記

今回の101号は、広報誌としてはマイルストーンである100号に続く新たな第一歩目です。そこで特集として、コロナ禍においても防災研究所が着実に活動を継続し、その先の未来へも邁進していることを示すために、所内の取り組みを様々な観点から紹介しました。人が集ってこそその防災研究所ですが、なかなか構成員の活動が目に見えにくい時があっ

たと思います。特集では、紹介とともに記録としても残すことができませんでした。アンケート結果も全て紹介しきれませんでした。研究者からの視点で見ると、コロナ禍でもぶれずに研究している姿も印象的です。防災研究所の柔軟さと芯の強さを見出しました。

(宮澤理絵)

「DPRI Newsletter」のほかに、こちらからも防災研の情報がご覧になれます。



ホームページ
<https://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>



YouTubeチャンネル
<https://www.youtube.com/channel/UCQ22ABWTJkxolMxLANLkMLQ/>



Facebookページ
<https://www.facebook.com/DPRI.Kyoto.Univ>



メールマガジン（登録ページ）
https://dpricon.dpri.kyoto-u.ac.jp/mailmagazine/mailmagazine_user.php



Twitter
<https://twitter.com/dpřitwit>

京都大学防災研究所 Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

編集／京都大学防災研究所 広報・出版専門委員会、広報出版企画室 発行／京都大学防災研究所
〒611-0011 宇治市五ヶ庄 Tel: 0774-38-3348 (代表) 0774-38-4640 (広報)
ご意見・ご要望はこちらへ toiawase@dpri.kyoto-u.ac.jp

2022年9月発行